

地球第十二卷第四號

昭和四年十月一日

東亞地域の概観 (三)

小川 琢 治

一〇、漠北の山嶽

中亞高地の箇々の地帯に就いて更に詳説する必要がある。中亞の北邊には北米洲の北部（ジウス氏のカナダ地楯）北歐（フェノスカンヂア臺地即ちバルチック地楯）と鼎立する東シベリア地楯と呼ぶべきジウス氏の所謂アンガラ陸地 Angara-land を中心とした東北アジアの大部分を占めるものがある。此等は何れも始原代岩層の露出地域にして、主として片麻岩花崗岩及び結晶片岩から成り、地球表面の陸地となつて露はれた最も古い地域を代表するものと看做されてゐる。アンガラ陸地といふのは中生代珠羅紀頃の植物化石を含む岩層に被覆されるのみで、海成層が発見されないからである。ジウス、オブルーチエフ兩氏が此の東北アジア地方をアジアの頂顛と呼ぶ意味はオブルーチエフ氏に従へば此等の岩層にはカムブリア紀以前に褶曲が起つたのみであるからで、北極海のニコライ第二世陸から東タイミル半島に渡り來つて、西南に彎屈してエニセイ河中下流の左岸に沿ひ鈍

いS字状を描く褶曲がこの陸地の西邊を劃し、南方でこの古い褶曲を代表するものは蒙古アルタイ杭愛、薩顏、スタノブオイの諸山嶽で、イルチシュ及び黒龍江兩河の上流灌域に屬する地方である。之を約言すれば我々の今考察せんとする中亞の北邊は此の頂頭地域のバイカル湖以南に延長した部分に當り、我々は之を漠北山嶽として區別する。

此の山嶽は秀點の海拔三千米を超えるものがあつて、峠と雖も蒙古阿爾泰（エクターグ・アルタイ）西部で二九六〇米、杭愛（烏里雅斯臺の東）で三〇六〇米に達する處がある。蒙古の西北角に當る科布多の山地は沙漠境界線を成すアルタイ杭愛の北に在つて、その北部はエニセイ河の流域に屬し、その東部はバイカル湖に注入するセレンガ河に灌流され、エニセイ河流域の南界にはタンヌオラ（唐努鄂拉）山脈が横はり、エクターグ・アルタイとの間にウブサ・ノル、カラウス等の大小の鹹湖を湛へた凹地を成し、ピエブツォフ Pevsov 等の探検者は兩山脈に對して此の凹地は地塊が陥没して生じた地溝なることを認め、之を湖沼谷 *Seer-Tai* と名けた。但し此の兩地壘の間には露支國界に尙ほサイルンゲム山脈があつて此の凹地の界を劃してゐる。

此の漠北山嶽の最近の踏査はニューヨーク北米博物館の中亞探検（一九二二—二三年）にしてその地質豫察報告（一九二七年）はバーキー Berkey、モリス Morris 兩氏の執筆に係り、頗る要領を得たものであるから左に抄譯する。

戈壁地域の北界は到る處山嶽多く、之を分つて三部となし得。西部はタンヌオラ（唐努鄂拉）と稱する斷層地塊の山脈より成り、その西はサイルンゲム山脈に接し、その東は小なる數多の斷層地塊

となつて杭愛地壘に連る。中央部は杭愛ガンギンダバ、ケンタイ(肯特)の諸山脈を含み、何れも各種の岩層の圓く膨らんだ穹窿地と考へてよいものである。東部は後バイカル地塊山より成り、互に累り合ふて斜に戈壁窪地に臨み、その西南端は戈壁の堆積物に没してゐる。

戈壁窪地から西北に延びた回みは所謂湖沼谷にして、斷層により生じた唐努鄂拉の峭壁がその北に聳えて、北界を成し、南界に更に長く延びた斷層により生じたアルタイ山脈の地壘と相對するを認め得る。この地塊の主山脈を成す岩層はジュスに從へば片麻岩花崗岩泥盆紀礫岩硅岩石灰岩斑岩石炭紀砂岩泥灰岩珠羅紀アンガラ層等にして、その東南部の低いカラクルの東西兩邊でハウゼンの觀察した所では綠岩石灰岩及び千枚岩を貫いた花崗岩から閃綠岩斑礫岩に移化する火成岩が大部分を占め、泥盆紀砂岩及び石灰岩は斑岩及び熔岩層を伴ひ、此等の更に古い岩層を不整合に被覆すといひ、少くも二回の古期褶曲が起つて山嶽の褶曲構造が出来たのである。現在の構造は更にその後新に斷層運動が起つて出来たものと考へられ、山脈は數多の地塊より成り、カラクルの如き縦谷の或るものはこれ等の地壘間の地溝であることが明かとなつた。

唐努山脈の東に連るものは杭愛嶺にして、湖沼谷と土拉河との間の山地の總稱である。ジュスは杭愛は東に向ひ肯特山及びウルガ(庫倫)の北の山地となり、更に後バイカル諸山に接し、戈壁と杭愛との間に何等の構造上の境界線はなく、沙漠中にも杭愛と同じ構造の殘壘が見えるといつた。

セレンガ流域を踏査したトルステキン(一九一九年)に從へば、急峻に褶曲した結晶質石灰岩がテルギルメリンとコンゴル(庫蘇庫爾)の間にて北三〇乃至五〇度西の走向を有し、ムリン河北では

白雲質石灰岩が北々東に走り、花崗岩及び花崗斑岩に貫かれて接觸變性を呈し、石灰岩に伴ひ硅岩砂岩硅板岩等も出るといひ、トルスタキン氏は之を先寒武里岩層と看做してゐる。是よりも緩慢なる褶曲を成した不明の植物化石を含む綠色及び紅色砂岩礫岩粘土等の岩層が基性噴出岩によつて綠泥片岩となつたものも出で、ト氏は之をアンガラ層と看做した。然れどもオブルーチュフは庫倫と恰克圖の間で發見した珊瑚及び蕨蟲化石から推して之も古生代岩層ならんといひ、蒙古北部には古生代新期より後に海侵を受けなかつたと考へた。

西中兩部は戈壁の北界は北氷海との分水山脈にして、その南の水は皆な鹹湖に入つて蒸發するが是より東の肯特山脈に發源する怯魯倫河は南流して戈壁の北邊を流れ、東流六百餘浬にしてダライノル（呼倫池）に滙して再び東北に流れ、アルグン河となつて黑龍江に合する。此のアルグ河谷は後バイカル斷層地塊系の地溝の一で、その分水嶺たる地壘はオブルーチュフに従へば山頂も溪谷も廣潤なりといひ、斷層により生じた山脈は多少彎屈して弓狀を成すも、褶曲の走向は必しも之に平行せぬが、オブルーチュフ氏はその成生を壓力に歸せんとしてゐる。ジュウスの破綻線 *Disjunctive line* なる一種の構造線の名稱は此に應用されたものである。

之を要する地盤の構造から觀て戈壁の大窪地は北部の褶曲した岩層より成る諸山嶽に比して非常に若い時代に出來たもので、褶曲に伴ふて生じた部分ではなく、遙かに之に後れて後バイカル山脈の隆起と同時に凹曲したものである。即ち兩者は共に準平原作用を受けた古い山嶽の歪曲して生じた凹凸に過ぎぬ。

一一、漠北の古代住民（一）

漠北の山嶽は此の如く、その南部は北緯四十五度北端は五十三度邊までの間に蟠踞してゐるから海拔三千米を越えた處に氷河が發達し、その南測の斜面を流るゝ河流は沙漠に消失するものが多いが、山間の大小の凹地には鹹湖（淖爾）を涵養するものが頗るある。此等の水草ある平地が中亞民族の搖籃地として頗る重要な役割を演じ來つた。その現在の住民は蒙古人で、清朝外蒙古喀爾喀四部の占據する所である。

支那の史乘に見える記載は張穆の蒙古游牧記（卷七）に綜括したものがその要を悉くしてゐるから左に擧げる。

喀爾喀四部八十六旗、東至黑龍江呼倫貝爾城界、南至瀚海、西至阿爾臺山、與新疆伊犁東路界、北至俄羅斯界、東西延袤五千里、南北三千里、古北狄地、唐虞則山戎、夏則獯鬻、周則玁狁據之、秦漢曰匈奴

といふのは此の土地の最も古い住民に關する記載にして、支那歴史家の常套語である。然れどもその北狄といふのは東夷南蠻西戎と對立した語にして、特殊の民族を區別する意義なく、唐虞の山戎であるといふのは司馬遷の史記匈奴傳にいふ所なるも、莊公の三十年に齊人が山戎を伐つたといふ春秋の經文以前に溯るべし文獻を缺き、齊人の勢力は漠北に及んだと考へ難い。故に之を唐虞以前の原住民族の名稱とするのは不可解であり、又たそんな神話時代を考慮する必要もない。

夏に獯鬻といふとの語は周人の祖先古公亶父が渭水の流域に移住した傳説にこの民族に攻められて遷つたといふに基くもので、此の蕃族が今の陝西の塞外に在つたことは信ずるに足る。玁狁といふのも周室の統一後に至つて屢周人が征伐したことが詩經に見え、兩者通音の語であるから同じく塞外に此の如き蕃族がゐたと考へることは出来る。然れども何れにしても山西から鄂爾圖斯の間即ち冀雍兩州と接壤の地に占居した民族で、その北方何處までに及んでゐたかが分らぬ以上は、漠北の全地域がこの民族の版圖でもあつた如く想像し難く、或は河套即ち鄂爾圖斯地方及びその西に連る甘肅地方に限られたか又はその西にも續いて河東の山戎と區別して西戎と呼ぶべきものかと推測されるのである。

此の如き支那歴史地理家の從來の見解を離れて、我々の先秦文獻の研究により獲た所を推衍すれば、秦漢の間に匈奴民族の現出する以前の漠北住民の中で稍確かな實在性の認められるのは西夏民族である。西晉太康頃に汲冢から出た穆天子傳に就いて、穆王の西征線路を追跡するに、漢代の黃河北屈部に當る五原朔方兩郡の地方から北又は西北に向ひ西夏の邦に至り、それから南下して寧夏蘭州間の黃河峽谷(傳にいふ河首)に達したと推定され、西夏なる民族が天山東端の南邊から寧夏の西及び西南に亙る漠南の泉地に散布する般人と同族の西膜民族の北に占居し、その部落は多分阿爾臺山脈の東端から杭愛山脈の東南麓に沿ふた地方に散布したものとなる。西夏國のことは此の外に逸周書史記解にも見えるから周初西北の一民族であつたことは疑を容れぬのである。

匈奴といふ民族のことは逸周書王會篇に成王の時洛陽に朝貢したもの、中に見える外周代の信憑

し得る文獻を缺き、穆王西征の時にもその部落は通過してゐない。故に特殊の民族として既に存在したとすれば陰山の東北斜面に占居してこの線路外に在つたのでないかと疑はれ、又た當時の犬戎なるものゝ一派でなかつたかとも疑はれる。

司馬遷は何に據つたか匈奴傳の劈頭に匈奴は其先祖は夏后氏の苗裔なり、淳維と曰ふといひ、注解者張晏は殷の時に北邊に奔つたといふ。若し漢代の初頃まで何か傳承があつて太史公に記録されたとすれば、西夏と共に夏后氏の後裔即ち夏民族の一派と看做し得られ、西夏民族の東に當るトランスバイカル山嶽の南邊ケルレン(怯魯倫)河地方が匈奴の郷土であつたと考へられて來る。

此の考説から更に推衍すれば犬戎山戎等の名稱は或は東夏民族として區別すべき匈奴と同民族の部落に與へられたものであるかも知れぬ。

之を要するに我々の徴し得る支那文獻に従へば漠北の最も古い住民は支那に南下した夏后氏と同族で、興安嶺の谿谷地方に定住した犬戎山戎の如く農耕を竝べ行はぬ游牧を專業とするもので、少くも匈奴はその一派であつたと想像される。興安嶺の新石器時代住民が既に石鋸を使用したのから推せば、山戎の如き南下したものは文化の進歩し得る邊縁地帯の地文的影響を受けたことは明かである。故に高い文化の彼等と漠北の住民と同族であつたとしても怪むに足るまい。

近頃考古學上の發掘が進捗し、石器の出土が少くないから、漠北の原住民族に關する智識は黃河流域に於ける出土の遺物と對照して闡明せらる所の多かるべきことは期待される。中歐及び西歐の石器時代は希臘羅馬の文獻と聯絡が殆んどないのと趣を異にし、中亞及び東亞の石器時代と原史時

代との間には氷河によつて攪亂されてゐないから、我々は原住民族の殘存した形跡を辿る關鍵が將來の探究により得られる望があると信ずる。

一一、漠北の古代民族（二）

張穆は匈奴の興亡を叙して

漢初冒頭并有漠南、衛青霍去病連攘郤之、乃復北徙、後漢仍爲北匈奴地

といひ、秦漢の間に長城を築いて匈奴の侵入を防いだ後に、武帝が積極政策に出でて、屢漠北の根據地に兵を送り、漠南の侵略地を奪回したことを述べ、次に六朝から唐宋までの間の民族の興衰を叙し

て後魏曰蠕蠕、蠕蠕滅而突厥興、盡有西北之域、唐初李靖擊滅突厥、回紇及薛延陀並稱強、李勤滅薛延陀、回紇遂并有其地、五代至宋、回紇始衰、興室韋、突厥、回紇諸部、散居其地、羈屬於遼、金太安初、蒙古始盛、

といふ。

此の衛青霍去病の前漢諸將が漠北に往つた極點は判然たらぬが、後漢の竇憲が匈奴を伐つた時には諸道の軍を涿邪山に會せしめたといひ、北單于と稽落山に戦つたといひ、竇憲と副將耿秉とが塞を去る三千餘里の燕然山に登り、石に刻して功を勅し、漢の威徳を紀し、班固をして銘を作らしめ、惟れ永元元年（年）秋七月云々といふ。此の涿邪山は張穆の考定に従へば朱邪と轉し更に處月に轉じたと考へ、耶律鑄涿邪山詩注に南處月の郊に隣るといふ語の處月が涿邪山に當るとした。

果して然らば燕然山も亦も杭愛山脈の南斜面なるべく推定され、北匈奴の根據地を距ること餘り遠くない處であらう。但し此の涿邪は穆王の經路に當る濁繇、壽余、朱余などいふ部落の民族名と共通の地名なるは勿論で、周初に既に阿拉善額爾特的の居る邊まで南に延び蒙古中部の民族を成してゐたらしい。此の考説に従へば北魏拓跋族が蠕蠕の醜名を與へた柔然が或は又た朱余民族で、若し拓跋氏が徙つた大澤なるものが庫蘇古爾であつても他の更に南の淖爾であつても、その南方に古くからゐた民族であることになる。

北魏拓跋氏はその郷土の位置から推せば人種上今のブリヤット(蒙古人の一脈)に屬するならんと思はれ、匈奴の盛んな時に之に隸屬した朱余即ち柔然とは根本から異つた人種ではなかつたらしくなる。

然れども現在は阿爾泰山脈から西及び西南に延びたステップの地方には蒙古人と同じく游牧を專業とするキルギース民族がある。このステップの東北に韃靼人と呼ぶものと共に土耳其族の一部である。彼等の祖先も亦た漠北の境界にゐたもので、レナ河流域のヤクト人と同族の支派であるとすれば、ツングース族が黒龍江流域から北進して、之と西方の同族の間へ出た如く、今のブリヤット蒙古人も北進したとも考へ得べく、拓跋氏は土耳其族の一派となる。

尙ほ第三の考説として漠北に占居した夏人、犬戎、匈奴等の古代諸民族が皆な土耳其族と共通の祖先から出たと考へることも出来る。果して然りとすればその言語體質の相異はイラン、ツングース、チベット等の古代住民と接觸して永い年所の間に著しい變化が起つて、その血族關係が次第に

不明となつたとして説明される。穆王の西征に當り嚮導した伯天は夏人の後で河伯を祭るものであつたが、西膜(亳)の殷人部族を歴訪し、その言語が周人と異つて黒水を鴻鷺水として通譯したのから推して、夏殷兩民族共に土耳其語系に屬すると察せられる。是は薄弱なる根據に過ぎずとするも第三の考説を支持するものである。

此の如く漠北の住民は三代以來土耳其人と同族であつたといふ考説を採用すれば、古代希臘人のスキートと呼んだものゝ一派ともなる。前稿に述べた如く西方に於いて生活の困難なる氷河時代に漠北も漠南も共に却つて降水量の多い好氣候を樂しみ、新石器文化が發達したといふ考説と併せて中石器文化民族の一派が此處に占居して、次第に邊縁地帯に分布したと考へ得るのである。

漠北の原住民に關する我々の智識は尙ほ不十分であるから、今後新しい資料が出た場合に我々の考説成立の可能性乃至蓋然性が増すか減するか逆睹し能はぬ。故に我々は單なる作業考説として提出し置くに止める。

河成面と海成面の關係に就いての理論及び應用

東 木 龍 七

一、研究の方針

1、平野形態學

2、河成面と海成面の連続

3、研究結果の應用と土地の運動

二、豊前海岸平野の形態成因

1、海岸平野の形態と成因